

団塊のカタログ

トシタロー・クラフィティ

映画とワシ

ここ数年のビデオの普及は目覚ましい。
300円で見たい映画が手軽に借りられる。
良くいえばそれだけ映画が身近になったの
だろうが、逆にありがたみもない。

団塊の世代が小学生だった頃はテレビがよ
うやく普及し始めた頃だったし、名画劇場も
ビデオもなかったから、映画を見るには映画
館に行くしかなかった。

その映画だが、漫画映画はともかく洋画は
字幕付きだから小学生には難しすぎる。

画面に集中すれば字幕についていけないの
はともかく、読める漢字の絶対数が少ないか
ら意味がわからない。

したがって、必然的に日本映画になる。

☆

まずは**松竹**。この頃は文芸作品が主体
で、良い子には縁がなかった。

ホノボノとした小津安二郎監督作品の芸術
性も今なら理解できるが、この頃に興味がわ
かなかつたとしてもやむを得ない。

「二十四の瞳」は小学校の講堂で見た。

タメになる映画だとは直感できたが、内容
が暗くて面白いとは思わなかった。

4年生（昭和32年）の頃に封切られた、同
じ監督木下啓介・主演高峰秀子の「喜びも悲
しみも幾年月」は上野松竹で観たが、3時間
を超える大作であつたにもかかわらず、こち
らは結構面白く決して長く感じなかった。

日本各地の美しい風景と迫力ある嵐のシー

ンは印象的だったし、若山彰が歌った主題歌
もお気に入りだった。

♪ おいら岬の灯台守は 妻と二人で
沖行く船の 無事を祈って
灯をかざす 灯をかざす

アタマの**おいら岬の灯台守**を**おいら岬**とい
う岬があるのかとばかりズーッと思い込んで
いて、**おいら＝岬の灯台守**だとわかつたのは
ジマンじゃないが最近である。

☆

大映は長谷川一夫主演の「日蓮と蒙古
大襲来」を5年の時（昭和33年）に観ただけ
で、**新東宝**も鶴淵晴子主演の「ノンち
ゃん雲にのる」（30年）くらいである。

日活は「ビルマの竪琴」（31年）「力
道山物語・怒濤の男」^{どとう}「若の花物語・土俵の
鬼」くらいで、石原裕次郎の主演作はなぜか
1本も見えていない。

☆

東宝といえば黒沢明監督、巨匠だとい
うことくらいは一応知ってはいたが、残念な
がら小学生の時には縁がなかった。

31年に初代三人娘（美空ひばり・江利チエ
ミ・雪村いづみ）が初共演した「ジャンケン
娘」と34年に封切られた「日本誕生」（三船
敏郎主演）だけだ。

☆

これで松竹・大映・新東宝・日活・東宝と
勢揃いしたが、どうも1社欠けている。

そう、ワシのごひいきの**東映**である。

右太衛門と千恵蔵

大映が一時期1本立てだった以外は、日本映画は2本立ての週替わりが普通であった。

レコードのA面とB面のようなもので、A面にあたる映画は大体が総天然色（そうてんねんしよく、当時はカラーとは呼ばなかった）で上映時間もたっぷり90分だが、B面にあたる作品は白黒で60分程度の小品が定番である。

野球でいえば2軍のようなものだから、ここで人気が出ればビッグは保証される。

山城新伍・北大路欣也・松方弘樹・梅宮辰夫・高倉健などがその好例で、後にこれらの皆さんはA面の主役をはれるまでになる。

この頃すでに東映の看板俳優だった中村錦之助・大川橋蔵・大友柳太朗・東千代之介などにしても、格と貫禄で右太・千恵の両御大にはかなわない。

☆

「この額の向う傷をなんと見る。天下御免じきさんはたもとの直参旗本三千石、姓は早乙女名は主水介。さおとめ るんどのすけ人呼んで旗本退屈男、ムフハハハハッ、パッ！」と、あたりかまわずツバを飛ばしながら大見栄を切るのが市川右太衛門。

「ある時は片目の運転手、又ある時はキザな紳士、して又ある時は粋なマドロス。しかしてその実体は……私立探偵、藤村俊作！」と、セリフの段落の度に息を呑みこみながら2丁拳銃で悪者どもをキッとにらみ付ける7つの顔の男こと多羅尾伴内の片岡千恵蔵。たらおはんない かたおち え ぞう

どちらも林家木久蔵のモノマネで若い世代にも多少はなじみもあるだろう。

日本映画界で御大と呼ばれるだけの風格を持った俳優は今も昔もこの2人しかいない。

☆

鞍馬天狗や明治天皇を堂々と演じたアラカあらしかんじやうンこと嵐寛寿郎、確かに一世を風靡したが主

役をはれなくなっただけからはヤクザ映画の親分役なんかには未練がましく脇役で出ていたりして、御大としての器量おおこうち でんじやうは備わっていない。

丹下左膳でならした大河内伝次郎にもそれはいえて、ひと頃の東映のヤクザ映画ではこの2人が良い方のヤクザの親分役でよく出ていたもので、残り10分くらいのところで悪い方のヤクザにブツ殺されるのが定番だった。

☆

長谷川一夫も超大物だが、NHK大河ドラマ「赤穂浪士」(39年)の大石内蔵助役くらのすけは良いとしても、宝塚の演出もしたりと多分野で活躍し過ぎで氣にくわない。

☆

世界の三船敏郎にしても、黒沢明監督作品以外ではただの大根役者である。

「ショウグン」の將軍役はさすがの貫禄としても、スティーブン・スピルバーグの壮大な失敗作「1941」のマヌケな潜水艦長役はハラさえたった。

太い声でガナリたてるだけでも迫力はあるが、ただそれだけだ。

石原裕次郎も同様で、軍団の結束力も固く多くの人に慕われていたのは認めるが、大根ぶりは三船敏郎以上である。

セリフは棒読みだし、笑うシーンなどは演技以前で子役以下である。

慎太郎兄貴の「太陽の季節」が芥川賞に選ばれ、そのドサクサにまぎれてデビューしただけなのだが、世の中がヒーローを求めていたし、それまでの価値基準が変わろうとしていた背景もあってウケたのだろう。

育ちの良さからくる明るい性格プラス当時としては長身で脚が長かったのも一因だが、今ならそんなのはゴマンと程いる。

☆

万能性では長谷川一夫に、国際性では三船敏郎に、カッコ良さでは石原裕次郎にそれぞれ

れ一步譲る市川右太衛門と片岡千恵蔵であるが、日本映画界で御大と呼ばれるのに相応しいのはこの2人だけだと今でも思っている。

なぜかといえば、独断と偏見だが主役と特別出演以外は映画に出なかったからだ。(唯一の例外が千恵蔵の「大岡越前」だが、さすがの貫禄で主役をくっていたので許す)

そしてこれが一番重要なのだが、オールスターの主役がピタリとハマることである。

————— ☆ —————

昭和30年代前半、正月ともなるとこの映画会社でもエース級を投入したもののだが、東映ではオールスターと称して赤穂浪士とか次郎長モノを毎年上映していたものである。

4番打者がズラリと並ぶようなもののだが、4番の中の4番を打てる貫禄があったのが市川右太衛門と片岡千恵蔵で、東映ではこの2人が交代で主役を演じるのが恒例だった。

片方が純粋な主役(例えば大石内蔵助)ならもう一方はさり気なくワンシーンだけ出て引込む。翌年は立場が入れ替わる。錦之助や橋蔵など、当時の東映は客を呼べる男優には不足しなかったが、気品と貫禄でこの2人には誰もかなわなかった。

ヤクザ映画全盛時に鶴田浩二と高倉健が同様のパターンだったが比較にもならない。

テレビの普及と共に映画が落ち目になっていったのはしょうがないにしても、俳優が小粒になり、オールスターものがなくなって御大といえる風格を持つ俳優が消滅してしまったのはなんともさびしい。

若さま侍・大川橋蔵

そんな市川右太衛門と片岡千恵蔵ではあったが、あまりにもエラすぎちゃって、小学生のワシにはチョットばかり近寄りがたかったのも事実で、本来のヒイキ筋は大川橋蔵とか

中村錦之助の方だった。

大川橋蔵は「笛吹若武者」(30年。東映)で、中村錦之助は「ひよどり草紙」(29年、松竹)で、当時すでに大スターだった美空ひばりと共演させていただいてデビューしているが、このことだけでもひばりの偉大さが測り知れようというものだ。

————— ☆ —————

大川橋蔵の代表作といえばやはり「新吾十番勝負」(35年監督松田定次)だろう。

時の将軍(大友柳太朗)のご落胤^{らくいん}としてこの世に生を受けたのが主人公葵新吾^{あおいしんご}である。

その宿命に悩み、剣の道に志す・・・そんな内容の川口松太郎の名作なのだが、そのあたりの背景と理屈付けがムズカしかったのはともかく、はつきりとわかる悪者がいないのが気に入らなかった。

それに比べると、「若さま侍」シリーズは実にわかりやすい。

どこぞの若さまらしいのだが、なぜか伝方な喋り方をする美男の侍が主人公だ。

イメージとしては旗本退屈男の若い頃といった感じか。ドハデな着物は共通している。

————— ☆ —————

「おいおい、お弓ちゃん、よしねエ。ハハハ」と、射的場^{シエン}か小料理屋の二階で町娘をからかっている場面から映画は始まる。

そこに事件が飛び込んできて、今までの笑い顔が急に消え、若さまがマジな顔付きになって物語は本筋に突入する。

途中で黒覆面の怪しい一団に襲われたりするが、2・3分でケリはつく。

途中いろいろあって、水戸黄門で代表されるようなご存じの時代劇のパターンで、お代官様と越後屋が最後にはブツ殺されるかおナワになって、めでたしめでたし。

さて、エピローグである。舞台は大川端^{はた}の小料理屋の2階に移り、花火がポポポーンと

打ち上がり「たまやー」「かぎやー」のかけ声と若さまと娘たちの笑い声が重なる。

町娘が「さすがは若さまねエ」と言えば、「ははは。それより見ねエ、きれいな花火だぜい」と若さまが答える。

「まア、ほんとねエ。おホホホ・・・」とひときわ笑い声が大きくなり、やがて「終」の字が画面いっぱいに広がる。

このワン・パターン、今でもテレビの時代劇に引き継がれているが、よっぽど日本人の国民性にあっているのだろう。

その後東映はヤクザ路線に転向、橋蔵など時代劇スターの出番がなくなり、フジ系列の「銭形平次」へと活路を見出だすが、あのイナセな若さまのイメージが大きいくずれるのでほとんど見なかったワシである。

霧の大友柳太朗

ワシら団塊の世代で知らない者がいない映画の一つに「笛吹童子」がある。

主演は中村錦之助・東千代之介だが、最も印象に残ったのは大友柳太朗が演じた妖術使い霧の小次郎である。

この小次郎役が強烈で、以後、東映の男優の中では一番のお気に入りとなる。

市川右太衛門や片岡千恵蔵などと共に昭和初期から活躍していた大ベテランなのだが、ちょっとナマリがあつてアクセントのない平板なせりふ回しの、どちらかといえばダイコンに属する俳優である。

娯楽作品にばかり出演していた関係で映画史に残るような文芸作品にはトンと縁がなかったが、代表作は結構あつて「快傑黒頭巾」とか「丹下左膳」「むつつり右門」などのシリーズものがあげられる。中でもワシの一番のお気に入りかいけつ くろずきんは「快傑黒頭巾」である。

普段は貧乏長屋に住み、お決まりの傘張り

りなどで生計を立てている一介の素浪人なのだが、町娘が悪人どもに囲まれ危機一髪という時にどこからともなく黒装束・黒頭巾ピシッと決め、白馬にまたがり疾風のように現れて2丁拳銃をブツばなして去ってゆく。

快傑とは痛快つうかいな豪傑ごうけつという意味なのだが、こんな風に事件を解決するからだとはっきり思っていた子供はワシだけではない。

☆

東映の男優の中では別格で市川右太衛門と片岡千恵蔵の両御大、人気者と言えば中村錦之助か大川橋蔵で、これらに比べれば格ははるかに落ちるが、日本映画史上に残る作品に主演したことがある。

当時、ハリウッド映画はシネマスコープと呼ばれるワイド画面が当たり前であつたが、日本では依然として35ミリの標準サイズで撮影・上映されていた。

そんな中、東映が他5社に先駆け東映スコープを開発し、昭和32年（1957年）に記念すべき日本映画のワイド画面映画第一作として「おとり鳳城の花嫁」を公開した。

画面は3倍、迫力は2倍。第1作「鳳城の花嫁」封切り近し。乞うご期待!!

実際は1.6倍程度なのだが、その主演男優がおとり大友柳太朗であつた。

併映作が従来の標準画面（しかも白黒）だったせいか、初めて見る東映スコープは確かに迫力があつたことを覚えている。

☆

この後すぐ新東宝が大シネスコと銘めいうって「明治天皇と日露大戦争」を公開、邦画6社は次々と画面をワイド化していく。

その記念すべき第1作に、人気・実力共に今イチだったワシのアイドルおとり大友柳太朗が主演したのだから、弱いひいき力士が優勝したような、奇妙な優越感にドブブリとひたつた覚えがある。